

『屍人荘の殺人』

今村 昌弘／著 東京創元社（2017年）

神紅大学ミステリ愛好会の自称ホームズこと明智 恭介とその助手の葉村 譲は、美少女探偵の剣崎比留子とともに脅迫状が届いた映画研究部の夏合宿に参加することになった。合宿の一日目の夜、予想だにしていなかった事態に遭遇し紫滲荘に立てこもりを余儀なくされてしまった。緊張と混乱の一夜が明けると、部員のひとりが惨殺されていた。しかしそれは連続殺人の幕開けに過ぎなかった。異常事態の中、次々に殺害されていく部員たち。明智は、葉村は、そして剣崎は謎を解き明かせるのだろうか。



『斜め屋敷の犯罪』

島田 莊司／著 講談社（2016年）

北海道の宗谷岬に傾いて建っている屋敷がある。「流水館」という名前があるのだが、その見た目から「斜め屋敷」と呼ばれることの方が多い。この奇妙な建物を作ったのは富と権力をもつ富豪の浜本 幸三郎だ。1983年のクリスマスに浜本が「斜め屋敷」に客人達を招いてパーティーを開催した。しかし、翌日、密室状態の部屋で招待客の死体が発見される。しかも殺人は1度で終わらなかった。人々が恐慌を来たす中、探偵として招かれた御手洗 潔が謎に挑む。



『水車館の殺人』

綾辻 行人／著 山下 和美／画 講談社（2010年）



人目を避けるように山間に建てられた石造りの城館。巨大な水車が3基付いていることから「水車館」と呼ばれている。住人は白いマスクで顔を覆った車椅子生活の主人、少女のような妻、2人の使用人だけで、年に一度館の回廊に飾られた絵を観に4人の客が訪れる。1986年の来訪の日に凄惨な殺人事件が起こり、1枚の絵とともに失踪した男が犯人とされたまま事件は葬られ、1年が過ぎた。そして翌年、再び事件が起こる。過去と現在の事件が交互に時系列に書かれ、犯人に迫っていく。〈館〉シリーズの2作目です。

『金雀枝荘の殺人』

今邑 彩／著 講談社（2007年）

金雀枝に囲まれた古い洋館で、館の主のひ孫たち六人が殺害される事件が起きた。現場は密室であり、六人はグリム童話『狼と七ひきの子やぎ』に見立てて殺されていた。この奇怪な事件から半年以上経ったころ、被害者の兄弟たちが再び館を訪れる。館の主だった曾祖父、その妻エリザベート、過去に無理心中をした管理人夫婦らの関係についても考察しながら、偶然館を通りかかったという男、中里とともに事件の真相に迫っていく。そして全てが明らかになるかと思われた矢先、正体を隠していた犯人がついに本性をあらわす。



『「アリス・ミラー城」殺人事件』

北山 猛邦／著 講談社（2003年）

日本海に浮かぶ絶海の孤島に、ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』の世界を思わせるアリス・ミラー城がある。そして、城の名前でもあるアリス・ミラーを探せという依頼のもとに、多くの探偵たちが呼び寄せられた。依頼主からのルールはただ一つ、「アリス・ミラー」を手に入れられるのは、最後まで生き残った人間のみ。城の遊戯室にあるチェス盤には、これから起こることを予測するかのごとく、黒が1個に白が10個の駒が置かれている。殺人のたびに駒が一つ、また一つ、消えていった。



『スタイルズ荘の怪事件』

アガサ・クリスティ／著 矢沢 聖子／訳 早川書房（2003年）

傷病兵として本国に送りかえされたヘイスティングズは、知人のジョンに勧められ、スタイルズ荘で疾病休暇を過ごすことにしました。しかしある日、屋敷の主人であるミセス・イングルソープが殺されてしまいます。そこで、ヘイスティングズは友人のエルキュール・ポアロにこの事件を捜査してもらうことを思い付き、ポアロが事件を調べることとなります。一体、誰が何のためにミセス・イングルソープを殺したのでしょうか。名探偵のポアロが大活躍する、アガサ・クリスティのデビュー作です。

